

カミガモソウ（ゴマノハグサ科）の保全経過

（１）カミガモソウについて

日本の固有種であるカミガモソウ(ゴマノハグサ科)は小泉源一によって京都の上賀茂神社で採集され1925年に新種記載されている。しかし小泉以外に採集した人はいない。その後、初島住彦が1955年に奄美大島湯湾岳で発見している。1989年に日本自然保護協会などが編集したレッドデータブックでは絶滅種とされている。



1993年に兵庫県上郡町で発見され、翌年世知原町でも種が確認された。さらに2003年に高知県室戸市で発見され、生育地は国内で3カ所となった。環境庁では絶滅危惧 B類(EN)、長崎県及び佐世保市では絶滅危惧 A類(CR)に選定している。

（２）発見の経過

佐世保市と世知原町の境にある平河原池（現佐世保市）の水源の湿地で川内野が1992年夏に見たことのない植物を発見。ずいぶん調べたが種名が分からず、1994年に長崎女子短期大学の中西教授（現長崎大学教授）に同定を依頼した結果、絶滅種とされていたカミガモソウと分かった。

（３）種存続の危機

生育地に湿地に続く溜池の漏水防止工事が終了した1993年からは、水位が上昇し生育地が長期間水に浸かるようになった。水中でも発芽するが2ヶ月程水没状態が続くと腐れてしまう。

（４）保護増殖

溜池の水位を満水時より30～40センチ程下げると生育可能であるが、水利権の点から望めそうもないため、移植して保護をする以外にはなく、生息地以外で繁殖させ、増殖後に野外に戻す「生息地外保全」を実施することにした。

1996年12月の水の少ない時期に生育地の表土を持ち帰ったところ、埋土種子から約30株が発芽。また6月に胸まで水に浸かりながら採集してきた苗も順調に育った。この苗を基に、石岳動植物園（現九十九島動植物園）に増殖の依頼をしたところ了解が得られたので、増殖後に生育地等に移植することにした。

（５）保全の要望

1994年に本種の保護のために世知原町へ溜池の水位を30～40センチ下げて貰うよう依頼。しかし「水利権の問題があり容易ではない」とのことであった。理解を求めたいので席を設けてくれるよう何度かお願いした。しかし、なかなか話が進まないために、県の自然保護課にも相談した。しかし、結局は世知原町へ話が回っただけであった。その後も世知原町へは席を設けて貰うようお願いしたが結局実現

しなかった。1999年に再度、世知原町に水利権者との仲介を依頼したが話はまとまらなかった。このようなことで、生育地での保全是全く前進しなかった。

(6) 生息外保全

1996～1998年にかけて、市内の4ヶ所の湿地や溜池の縁に移植実験。そのうちの一か所、木場山の溜池で成功。溜池の持ち主の了解が得られ1998年に移植開始。2003年に生息地外保全地として池の縁を嵩上げし面積を拡げる。



(7) 生息地の整備

2004年にカミガモソウの保全事業が長崎県のパーナード事業に採択された。これまでの生育地の直ぐ上で溜池が満水になっても浸水しない場所の林を少し開き、そこへカミガモソウを移植することにした。

行政ではなく地元の方が精力的に動いてくれたおかげで、水利権者の理解が得られ移植地の嵩上げ整備が完成。ここに、石岳動植物園から譲り受けた約300株と当会で増殖した約100株を移植した。



(8) 事業の進捗

1993年から保全是初めて10年目にしてようやく事業が前進。

(9) 現在の保全体制

不測の事態にいち早く対処出来るようにカミガモソウを栽培し、随時移植できる体制の維持。

生育地の適正な管理実施（主にイノシシの害を防ぐ電気柵の維持管理）

生育地外保全として木場山の溜池を確保し適正な管理の実施（水位の管理とイノシシの害を防ぐ）

適正管理のために最低月一回巡回管理を実施している。